

愛された町並み

活気と潤いの原点

江戸時代後期から昭和初期まで「酒造りの町」として名をはせた御船。御船川沿いの「白壁の酒蔵」と「赤レンガの煙突」は歴史の代名詞そのものだ。文化的価値を誇った町並みの記憶をたどる――

御船川の恵みで酒造り

御船はかつて、県下第一の「酒造りの町」として知られていた。御船川沿いに築かれた石垣に林立する白壁は、安政、文久、慶応から明治ごろの建築で、酒造りが盛んだったころの姿を残していた。その面影は、御船のシンボルとして愛されていた。

酒造りには、良い水、良い米、良い気候の条件が必要とされた。この御船の大地には、阿蘇外輪山から流れる御船川の豊かな清流があった。この水なくして御船の酒造りはできなかった。しかも、これに醸造する良質の御船米があったからでもある。また御船川は、川舟の運送が頻繁な商工業交通の地の利を生かす役割も担った。自然の恵みと地形を利用して酒造元は、競って

御船川沿いに酒蔵を築いた。

酒蔵は2階建てで、大黒柱は2階までの通し、30センチ超角のケヤキやセシダンが使われ、梁は驚くほど大きい木材を使い頑丈だった。酒造りに必要な外気を極力さけ、一定の温度を保てるように、風通しや天井の高さ、窓の取り具合も細心の工夫が加えられていた。壁は「大壁」といって、中は竹で組み合わせ、その上を荒塗り、中塗り、そして上塗り、と三重に塗られていた。その壁の厚さは30センチもあり重厚で白色な造りだった。

このころの白壁建築といえば、城や会所・役所、藩庁だけに限られていた。つまり御船の白壁は、明治に入ってから土蔵を白壁に塗るかえられたと推測される。江戸から明治にかけての土蔵建築の最高を誇った造りと称

され、建築学会からも注目を集めた。

この「白壁の酒蔵」が残っていた景観は、お金では買えない価値をもった文化財ともいえた。

天高くそびえた煙突

御船は煙突の多い町だった。しかし今は、一本の煙突も立っていない。御船川沿いの平坦な町並みで、高いものといえば、酒造元、醤油醸造元、製糸工場の煙突くらいだった。高さは20メートルほど、ほとんどが古風な赤レンガづくり。丸形や角形とさまざま、家の銘柄を白いレンガできれいに浮き彫りした煙突だった。町中に数十本が立ち並び、



↑新橋上流左岸に酒蔵と煙突を構えていた常薫酒造。戦後に起業して御船の酒造伝統を引き継いでいた

いかにも商工業の町らしい風景が御船を彩っていた。毎年10月になると、酒の仕込みで町はにわかに活気づいた。川沿いの酒蔵では米を洗い、仕込みの季節を迎える。蔵中がごった返す忙しさだ。やがて朝モヤをついて赤レンガの煙突から、モウモウと景気のいい白い煙を吹き上げた。

だが昭和12年ごろから、煙突の煙を見ることが少なくなった。まきや石炭から、石油の時代へと変わった「エネルギー革命」によって。不況の波にもあおられ、酒造元や醤油醸造元は次々と倒産や廃業に追い込まれて、煙突は煙をはかずにその役目を終えた。

太平洋戦争の末期、米軍機が片田舎の御船上空をわがもの顔に飛び回った。軍需工場の煙突に間違われ危険ということで、軍や県から取り壊し命令がでる。しかし、徴兵で男手もなく、堅固な煙突だったことが幸いして取り壊しを免れた。白壁の土蔵と同じく、長い間昔ながらの姿を残していった。

そんな「赤レンガの煙突」も昭和35年ごろから次々と取り壊されていった。古きよき時代の風情、そして「白壁の土蔵」の消滅と運命を共にしたのだった。

↓「酒造の町」を象徴した赤レンガの煙突（松永忠勝さん提供）



白壁と酒造の歴史

- | | |
|------------|--|
| 1820（文政3） | 角雑穀屋・増永三左衛門が牛ヶ瀬村で酒造業を始める |
| 1855（安政2） | 吉沢酒造場（酒銘・沢の悦）が辺田見村に創業 |
| 1865（慶応元） | 永守酒造場（酒銘・鳴滝）が御船村で創業 |
| 1868（明治元） | 杉田酒造場（酒銘・精長）が御船村で創業 |
| 1872（明治5） | 山崎雑穀屋酒造場（酒銘・珍）が御船村で創業 |
| 1873（明治6） | 上田酒造（酒銘・頂鶴）が滝川村で創業 |
| 1882（明治15） | 松永酒造場（酒銘・城響）が滝川村で創業 |
| 1889（明治22） | 酒博士と称された住江金之が角雑穀屋の四男として誕生 |
| 1894（明治27） | 田中酒造場（酒銘・菊の露）が御船で創業 |
| 1899（明治32） | 県下長者番付で80位以内に御船町の造り酒屋10人が名を連ねる |
| 1907（明治40） | 安藤酒造（酒銘・滝の露）が滝川で創業 |
| 1937（昭和12） | 国策の重税圧迫で酒造元が衰退。相次いで廃業または倒産 |
| 1944（昭和19） | 田中酒造場は企業整備のため、上田酒造、松永酒造場、杉本（現山都町）と統合。菊の露酒造株と改称する |
| 1949（昭和24） | 昭和13年に杉田酒造場を買収していた常薫酒造が起業 |
| 1975（昭和50） | 菊の露酒造株は清酒の協業化を図り、美少年酒造（現熊本市）で集約醸造を開始 |
| 1977（昭和52） | くまもと名勝百景で白壁の酒蔵が入選 |
| 1979（昭和54） | 常薫酒造株が廃業。醸造伝統（延べ29酒造場）の灯が完全消滅 |
| 1983（昭和58） | 御船川河川工事のため上田酒造の酒蔵が河川改修で解体 |
| 1985（昭和60） | 町指定文化財「白壁の土蔵」が河川改修で解体。御船川沿いの白壁酒造群は完全消滅 |

写真 / 昭和30年代、五庵橋から望む上田酒造の酒蔵（松永忠勝さん提供）

白壁の歴史を撮り続けた写真家
松永 忠勝さん（滝川・89歳）

白壁の酒蔵は、将来的に必ず無くなると思って、写真として記録におさめました。御船川沿いにあった白壁は御船の町並みを象徴する風景でしたから。時代の流れとはいえ、無くなってみてその価値がわかります。あのころは本町通りが県道でもあり、酒造りや人の流れがあって、活気もありましたよ。

